

「まだみぬ世界の友」

ヴァーシャ・ヴェリノヴァ

二宮由美訳

モンテニユは、対話とは「人間の精神にとって最も実り豊かで、自然な訓練である」と記したが、そのとき彼は今世紀の終わりに対話が、知識、自己認識、自己完成を求める人々の努力から生まれる目的観に満ちた知的営みとなることを予測していただろうか。池田大作氏の世界的に著名な知識人、政治家、哲学者との一連の対談集を知る人にとって、『美しき獅子の魂⁽¹⁾』と題された最も新しい対談集は「知性の祭日」、つまり真に知的な喜びを与える書である。それは、なぞめいたタイトルや、対談者が初の女性であるという事実の

ためだけでなく、技術と自信に満ちた今世紀の終わりにあつて、「内面と過去」を検証し、歴史性に関する永遠の本質、民族と個人のアイデンティティを再考し、それなしでは生きられない精神的価値の復活を試みただけである。対談集の一部は、出版以前に英語版『東洋学術研究』(The Journal of Oriental Studies) に二回にわたつて掲載され、そこで私たち読者は、非常に寛容な二人のパートナーに出会った。この二人は理想的仏教が東方キリスト教の精神性の根幹を探るといふ、一見、正反対の立場のようだが、数世紀にわたり形成された

日本人の威厳ある自制心が、型にはまらないスラヴ精神の広大さに刺激を受けるようすが伺える。しかしこの正反対の立場は表面的なものであり、テキストを読み進めると、池田大作氏とアクシニア・ジュロヴァ教授の両者が、学者としてだけではなく、その国民の民族精神の代弁者として、また稀にみる知性として、対話や具体的な諸問題を超える目的を抱いていることが明らかにされる。その目的とは、卓越した精神性であり、そこでは各個人の差別がなく、「知識」の前にみな等しく、知識の発展と完成のために同じように貢献し、宇宙は人間であり、そして人間は宇宙であるとされ、名目という意味がなく、本質こそが肝要であるとされる。このことをはっきりと理解したとき、読者は両者が対談集のなかで自身の情報を提示し、自身の価値観を率直に述べ、さらにより大きな心を読者に贈っていることを、理解する。

ジュロヴァ教授の学術的・社会的活動はブルガリア国内ではよく知られている。その研究論文、基礎・特別講義によって教育を受けたのは一世代の学生だけで

はなく、そのなかからビザンツ学、スラヴ学、芸術史の専門家を輩出した。また、教授は恩師に恵まれた。それは弟子たちが研究し、恩師が進んできた道を発展させるといふものだ。しかし私たち教え子は、ジュロヴァ教授が真の学問的情熱を注いだのは文化史、より正確に言えば文化史における哲学であることを決して忘れない。なぜなら、教授は事実の前に立ち止まることはなく、常に良い意味で好奇心が強く、事実の後ろにあるものを見、その事実を作り出した目には見えないう動き、相互関係と起因性を発見する。教授にとって「世界とは歴史である」ということ、そして教授はこの歴史のメカニズムを説明する大胆さと力をそなえていることは間違いない。この意味において池田氏と教授の対談は期待以上のものであり、今日のブルガリア人の民族心理を支配し決定している中世ブルガリア文化に関する博識にふさわしく、同教授による歴史への哲学的・美学的アプローチを提示するものである。

池田氏はブルガリアに多くの個人的な友人や、氏も知らない称賛者をもっている。ソフィア大学の名誉博

士であり、ブルガリア文学、芸術、歴史を熟知している。そして、ブルガリア文化社会において、その卓越した詩の創作とブルガリア語に翻訳された対談集（トインビー対談、ペッチェイ対談）によって知られている。感動的な写真展「自然との対話」は、一九九四年ブルガリアで開催された。同展の作品は芸術としての写真にとどまることなく、今までの伝統にとられない光、あたかも最も正確で、的確な日本の凝視を感じさせる。なぜなら、瞬間に対する感覚と天賦の才能は同氏を、美学的、永遠的にし、絶えず変化する永遠性をとらえ保持するために最大限の集中力と能力を要求する。この驚異的な洞察力は対談集『美しき獅子の魂』にもみられる。池田氏は歴史を自身の方法で解釈し、読者を神々と神話が生まれた人類の原郷へと導き、豊かな精神性と劇的な史実によって、見知らぬまだ見ぬ日本を私たちに提示する。最も本質的なものを統合し、例証し、生命を与え、シンボル化された形で明確に現わす、という手腕は、「獅子の意味」を検討している章の冒頭から読者を魅了する。

ここで強調したいことは、この対談集に型にはまった伝統的学問の提示、二国民の歴史の典型的構造的な探求、史実を静止的に扱う文献の歴史性、完全な客観化を見いだそうと期待する人は、なぜタイトルが『美しき獅子の魂』であるのか理解できない、ということである。この対談集がそなえる魅力と力とは、文献資料への型にはまらないアプローチであり、過去の史実を個々に合理化する試みであり、史実に生氣を与え、さらにヒューマニズムのプリズムを通してそれを再考することであるからだ。これは両者の共通した文化的態度であり、フーコーの「自身のイメージから開放されるために書く」という考えと同じである。彼の言葉をさらに意識して、私は以下のように付け加えたい。これは市民モラルの必要不可欠部分であり、書き手の内面的自由を保障するものである。『美しき獅子の魂』の両者は、この信条を高く具現化している。英語版『東洋学術研究』への第一回目の部分掲載では、獅子のイメージのシンボル化とその様々な歴史的再生について語られている。両者は自身の論拠を、具体的に象徴

的イメージから出発させ、人類の文化史へと導く。獅子のイメージは、ブルガリア人の民族心理の不変的な部分である。それは力と威厳の王制のシンボルとして、キリスト教以前の異教芸術、キリスト教の儀礼に存続し、さらにブルガリア民族復興期、民族解放運動の象徴としてモデル化され、今日の紋章にまで保持されている。そして、今日ブルガリアの紋章は王冠を伴った獅子という、主要素がある。もし私たちブルガリア人がこのシンボルの根を、獅子が統治者の威厳と国家の独立性を象徴していた第一ブルガリア帝国に見いだそうとするなら、この対談集は別の観点からこのシンボルを見ることを提示する。池田氏は読者をキリスト以前数百年に戻し、仏教を創唱した釈尊が、世界の四つの方向を向いた四頭の獅子とともに、表現されていることを指摘する。「私は、全民衆の幸福を願って立った釈尊の第一声が、獅子のイメージで象られていることに、非常な興味を覚えるのであります。あたかも百獸の王の雄叫びのように釈尊の説法は、あらゆる雑音を圧し、人々の心を根底から揺るがす力強い音声の響き

を持つていたにちがいません⁽³⁾（池田）と。この瞬間から永遠に、獅子のイメージは物質的な力と他への覇権を意味するだけではなく、自身の内面的・精神的な力と関連づけられ、これが対談集のこの部分の主要なモチーフとなっている。獅子のイメージに関する仏法上の解釈はエゴに対する勝利、内面的・精神的集中力、世俗的な空虚さの克服と関連づけられる。さらに、「これは、外部から強いられた法ではなく人間の内に存在する普遍的な法の統御を表わしています⁽⁴⁾」（ジュロヴァ）と続き、宇宙の調和に従属する内面的調和という考え方を人類学的に関連づけ、さらに教授は獅子のイメージについて、付加的なニュアンスを発見していく。ブルガリア国家（建国六八一年）の最も早い時期において、獅子は国家全体と国家独立の守護者であり保証であると考えられていた。「バルカン半島の十字路にあって、東西の境界線上で生き残ってきたわが国では、生き残りのために強力な守護者が選ばれたことは間違いないでしょう⁽⁵⁾」（ジュロヴァ）と。ブルガリア史の変遷とドラマティズムをよく知る人のみが、諸文明の十字路

に運命づけられた国家の運命の結末と、極度に厳しい時期の苦い真実を理解し、気づくことができるのである。しかし、これは同時に両者が比較文化学に立ち戻ることを刺激する。数百年前から存在し、諸イメージに凝縮されている文化的相互作用と相互関係の力学を強調するためのこの比較文化学の解釈は、今日の世界を説明するために大きな意味がある。過去における獅子のイメージをたどりながら、両者は、読者にもう一つの世界の文化地図を明らかにする。ここでは諸民族は孤立することなく、反対に、敵国にもかかわらずその周囲と類似した認識をもちながら、一定の組織体として存在していた。第一章一節「獅子の意味するもの」では、対談のなかで、池田氏とジュロヴァ教授によって選択された方法が読者に提示される。両者は、ある一定の科学的なものさしで限定することなく、文化的・歴史的方法を最大限に用い、現代史の分野の豊かな博識で統合していく。その博識は現代の私たちを取り巻く、今日的な事柄に関し、非常に高い自覚を伴い、人間の精神性の深い根を明らかにするという、素晴ら

貢献した人々の紹介に関する部分は、日本人でない読者にとって非常に有益であり、学問的思索の契機となる。他方、東方キリスト教に関する部分は、日本の読者にとって独創的で、東洋との類似的関係、歴史の変遷をへて存続した抵抗力を提示する。池田氏もジュロヴァ教授とともに、それぞれ仏教と東方キリスト教の弁護をその課題としていないことを、私はここで付け加えておきたい。宗教の諸問題に関する部分は、深いヒューマニズムとともに述べられている。なぜなら、私たち現代人は、人間と人生における宗教の大きな意味に関する明らかな解答を既にだしているからである。啓蒙運動、社会主義革命、無神論、科学技術、マスメディアとマスコミュニケーションという数世紀を経験し、人類はあたかも新たに、人生の意味、物事の判断、未来への責任という警鐘的問題の前に立たされているようである。なぜなら、自由な知性とは、知性的な自由を常に意味しないからである。理想、信、利他的な献身なくして人類の未来はないであろう。そしてまさに、これらの問題が、対談集の宗教に関する部分の中心と

しい通時性に達している。そのため、具体的なシンボル「獅子のイメージ」が対談の冒頭を独創的に象徴する一方、このシンボルに関する象徴的な文脈に生氣を与え、美学的にしながら、この精神性を人間文明の基本的に組織化された原理に変換している。

検討されている事柄に関するこのアプローチを理解すると、英語版『東洋学術研究』の二回部分掲載に関し、読者はより多く準備ができる。この二回部分掲載は、第一回は「東と西のキリスト教」、第二回は「宗教と日本文化」(仏教と神道)である。適切なテーマの選択は、キリスト教と仏教という二つの宗教的システムを単に比較するだけでなく、それらの発展の経過をたどり、それぞれの考えと観点の多様性を叙述する一方、東方とカトリック、仏教と神道の劇的な支配抗争を読者に提示する。この部分に関する論拠は、第一に宗教史の分析であり、それらの未来の運命について考察するため、その発展のいくつかの基本的な「時」の再考を試みている。仏教の歴史、その発生と日本に定着する道、ブッダの哲学的・人間学的教えの構築に

なっている。両者はこれらの問題に、読者各人が切実に直面するであろうとしている。

ジュロヴァ教授は専門とするビザンティン・東方キリスト教のモデルの特徴を明らかにしながら、中世ブルガリアの国家性と教会の伝統的要素を指摘している。教授はその学術・研究の寄与において、常に全体の枠における、個別・多様性を尊重している。そうでなければ、学問的発展はなかったであろう。ブルガリアにおける東方キリスト教モデルの新たに明らかにされた特徴こそが、この対談集の読者の興味を呼び起こすであろう、と私は考える。ビザンティン・スラヴ社会の部分としてのブルガリアは、高い「歴史的適応性」という意味において、ある稀な例証を提示している。そしてそれは、ジュロヴァ教授自身が指摘しているように、私たち民族の存続を保証している。

ブルガリア国家の歴史において、キリスト教がブルガリア民族の主な組織的要素となった時期があった。第二次ブルガリア帝国がその独立を失い、一三九六年、全国土がオスマン帝国の支配下におかれたとき、まさ

に東方キリスト教会が国家の諸機能を果たし、民族のアイデンティティとブルガリア人の権利を保証し、青年の育成と教育、そしてしばしば福祉を提供した。ブルガリア東方キリスト教会は、一八七六年の民族解放まで、数世紀にわたり国家の代理であった。このことが、民族心理、未来について何を意味するのか、理解できる民族は世界でも少ない。ブルガリア史のこれらの事実が思索の源となり、両者は、中国と日本、ビザンティンとブルガリア、後にはオスマン帝国と、自身の民族の歴史的運命における類似した要素を明らかにしようとしている。

ブルガリアの読者が興味と理解をもって読むのは、日本における仏教哲学の歴史に関する部分であろう。池田氏は十三世紀にさかのぼりながら、読者に仏教史の最も重要な要素をシステム化して紹介している。鎌倉時代の主導的役割を担った日蓮大聖人（一二三二—一八二二）は日本人の個人的世界観と仏教を結びつけることに成功し、仏教を日本人の精神性の一部分とし、最終的に古神道に打ち勝った。読者のまえに、ある内面的

な精神の進化が明らかにされ、その進化とは、普通の人々のなかに徐々に築かれ、精神性の基本的特徴となった。万人救済の道として、内面の精神的自己完成を目指す、深い仏教哲学は、人間の価値と人間の内面的自由の保持を保証し、ブツダが全ての各個人に存在するという世界である。

対談集の中で、仏教と東方キリスト教の歴史に関する部分は、広大な精神的地平線に向かう真実の鍵である。その地平線とは読者の前に明らかにされる、それに続くページである。両者は私たちに、これらの思想をもたらした人々について、さらに「書かれた言葉」の聖なる世界を紹介する。それはキリスト教徒が崇拜するロゴスであり、活力ある清々しい『法華経』の世界である。

以上のように、英語版『東洋学術研究』に部分掲載された最後の部分は、「まだみぬ世界の友」の古い写経について述べられており、それはマスメディアとスパー・コミュニケーション・システムを用いても近代の科学技術社会が予測しなかったものである。

おそらく日本とブルガリアにおける、中世文化の真の精神的近似性は、形にあらわれた写本の伝統において、一見したところ、とてもかけ離れている。書道は中世の日本において最も優れた芸術のひとつであった。ブルガリアにおいて、写本の作成、その装飾と保存は神聖な行為であった。ジュロヴァ教授はスラヴ写本に関する自身の研究において、書写する行為の神聖性について何度も指摘している。写本の書写家はロゴスの受理という神聖な行為を再現する。この行為は、東方キリスト教の写本の伝統においては、紙が物質的に吸収する、つまり受肉したロゴスが聖なる言葉の一部となると、関係づけられる。それは一面、神の創造的エネルギーである聖なる言葉の仲介の役割のみとなる。写本とは聖なるものの肉体である。そしてそのため写本は神聖なものである。書かれた言葉とその写本に関するこの概念は、文筆と書写の行為に反映され、各々の写本の優れた作業とその装飾を施すことへの強烈な努力を決定する。「書物は尊い宝です。人間の魂です。中世ブルガリア文学は、書物一般への賛辞をもって始

まりました。スラヴ文字を創案したキュリロスは、『一冊の書物も持たない人は、皆、裸である』と述べています⁽⁷⁾（ジュロヴァ）と。池田大作氏との対談で、ジュロヴァ教授のこの発言において、言葉に関する深い思想が統合されており、それがブルガリア文化の典型となった。九世紀、聖キュリロスの弟子たちが初期のスラヴ（古ブルガリア）写本をブルガリアにもたらし、新たにキリスト教を受容したブルガリア王国の、キリスト教文学のみならず文化的言語の創出者となった時、この文化的・文学的神話も精巧に仕上げられ、ブルガリア文化の根本的原則となり続け、今日にいたっている。ブルガリアの民族心理にとって、言葉とは知識であり、歴史の変遷に対する自己保存過程の武器なのである。言葉は自由を意味し、同時に力なのである。

日本の文化伝統において本の書写は、仏教と密接に関係し、このことは『法華経』の数多くの書写に例証される。『法華経』のテキストは、対談集の写本と書道に関する部分で、池田氏が主要部としてしている。そして一九九八年に東京で開催された「法華経とシルクロー

「ド」展に関する同氏の考えを深く共有できなければ、同氏のこの種の芸術に関する個人的な考えを理解することはできないであろう。「経典が喜んでいます。光っています。笑っています。経文は文字であるけれども『魂』です。宇宙の根源で『渦』を巻き、『波』うっている大生命力のリズムを写しとった表現です」(池田)。二つの異なった文化的背景に生まれた両者の言葉は、驚くほどの調和の響きがある。両者の影響を受け、読者は諸文化間の差異を忘れる。なぜなら独創的で異なったものに対し、無視することなく、共通で関連した認識を獲得するからである。

写本の伝統の歴史に直接、関係していない読者にとって、特に興味をひくのは写本を作り出す技術的な過程に関する記述であろう。本が情報をもたらす唯一のものではなく、かつて久しい時代に、その唯一性、書かれた言葉が真実の最高の道徳的拘束力であった時代に読者を戻す。おそらく写本の創作過程に関する両者の記述を注意深く読むと、私たちの精神性はどこにあるのか、という疑問を率直に自問する。なぜなら、まさ

題名として筆者が用いた「まだみぬ世界の友」という大きな意味を明らかにし、対談集を的確に表現している。

英語版『東洋学術研究』に掲載された最後の部分では、「黄金」という言葉の最も完全で正確な意味における、ある全人類的シンボルについて、検討されている。ブルガリアの北西部ヴァルナ市近郊において、人類で今までに知られている、最古の金製品が発見された。この金製品は五千年以上前のもので、ギリシャ、クレタ、キプロス、エジプト、メソポタミアのこれまでの有名な発見よりも古いものである。ジュロヴァ教授によれば、この発見は、人間の諸文明発展の確立した定説を覆し、多くの新しい仮説に刺激を与えた。対談者にとって、ヴァルナの黄金は、他の検討されるべき問題の起点となっている。人間文化の優勢のシンボルとしての黄金、様々な文化において様々な方法で用いられた、貴重な金属という価値あるいはそのシンボリック意味と機能について。ここで読者は、あたかも新たに、対談の初めの「獅子の意味するもの」に戻り、獅子と

にこの記述において、特有の力を有した今日の科学技術が、私たちに何をもたらすだろうか、という深い懸念が提示されているからである。識者にとって、没個性化はある黙示録的な見通しであり、そしてそのため池田氏もジュロヴァ教授も、人々の精神性を新しい水平線へと導く、答えと道を探している。画一化は人類の魅力的な展望とはならない。人類は世界の文化的伝統における多様性の恩恵によって、生き残り、豊かになったのである。そしてあるグローバル的隠喩を用いて、両者は読者をシルクロード、多数の種族と民族へと導く。そこでは数百年にわたり、東洋と西洋の活発な文化交流がなされ、それは私たちに差異を保持しながらの調和という例を示している。

「あらゆる人種、民族、文化の共存、また自然環境との共生を示す『智慧』は二十一世紀の『地球的共生の時代』を開く『鍵』であり、『法華経』の真髄である。」⁽⁹⁾「法華経とシルクロード」展における、池田氏の開幕の挨拶でのこの言葉は、人類のより調和的な世界を、表現しているようである。この言葉は、対談集の書評の

黄金というふたつのグローバルなシンボルによって対談集が組み立てられていることを知り、そのメッセージを感じるのである。黄金に関しては、仏教とキリスト教の伝統においても、常に両価的であった。キリストの像が黄金を背景にするとき、そのイコンは神の永遠性を意味し、黄金は具現化した神の光である。仏教においては、金は「七宝」の一つである。同時に黄金は富裕、力、権力を意味した。人類の黄金の世紀についての神話は、ブルガリア文化の黄金の世紀、キリスト教文学と芸術の最盛期に達した九世紀のシメオン王の時代に修正された。多くの大乘経典では、永遠で完璧な浄土の世界が金で描かれている。おそらく、両者は人類史における黄金の世紀についての古い神話に関して、新しい解釈を提示しているのである。おそらく、真実の価値を創出する「哲学の石」の探求に刺激されたのであろう。あるいは私たち読者を、二十一世紀の新たな神話創作に向かって、駆り立てるのであろう。この問題に関して簡単に答えることはできない。深く思索せねばならない。私たち読者は皆、思索せね

ばならぬ。おそろへんことが画巻の目的であった
のじゆんへ。

註

- (一) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova : The Beauty of a Lion's Heart (1) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 8, 1998, pp. 119-143; Daisaku Ikeda and Axinia Djourova. Dialogue: The Beauty of a Lion's Heart (2) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 9, 1999, pp. 96-131.
- (二) M. Foucaud. Archeologie de savoie, p.6
- (三) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova Dialogue : The Beauty of a Lion's Heart (1) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 8, 1998, p. 119
- (四) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova Dialogue : The Beauty of a Lion's Heart (1) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 8, 1998, p. 120
- (五) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova Dialogue : The Beauty of a Lion's Heart (1) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 8, 1998, p. 123
- (六) A. Djourova. Introduction into Slavic Codicology, Sofia, 1997
- (七) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova Dialogue : The Beauty of a Lion's Heart (2) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 9, 1999, p. 106
- (八) Daisaku Ikeda and Axinia Djourova Dialogue : The Beauty of a Lion's Heart (2) - *The Journal of Oriental Studies*, Vol 9, 1999, p. 108
- (九) The Lotus Sutra and Its World. Buddhist Manuscripts of the Great Silk Road. Tokyo, 1998. Preface from Daisaku Ikeda. p.2
- (サマシヤ・ウエリノヴァ／ソフィア大学助教授)
(訳・にのみや ゆみ／東洋哲学研究所委嘱研究員、
創価大学非常勤講師)

宗教的寛容から信教の自由へ

有賀 弘

一 はじめに

「宗教的寛容から信教の自由へ」という題を予告したのですが、具体的にお話するのは寛容の問題で、信教の自由の問題はほとんどなしということになると思っています。日本で書かれたものには「信教の自由」という言葉が使われている場合が非常に多いのですが、言葉の問題として「信教の自由」というのはあまり良くないのではないか。英語だと freedom of religion ですが、「宗教の自由」の方が良いのではないか、あるいは

せめて「信仰の自由」というほうが良いのではないかという感じがします。なぜかという点、「信教の自由」という言葉の与えるインプレッションは、freedom の問題であって freedom to の問題が含まれていないのではないかと思うのです。現代における宗教の自由というのはいささか freedom to に重点がおかれている問題であって、憲法上の文言から「信教の自由」という言葉が一般に使われることになったと思いますが、そういう意味では「宗教の自由」の方が良いのではないかという感じがしています。